

Title	アンティルの新しい文学をめぐって：「クレオール性 (creolite/creoleness) 礼賛」
Author(s)	恒川, 邦夫
Citation	言語文化, 32: 109-123
Issue Date	1995-12-25
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	<a href="http://doi.org/10.15057/8903">http://doi.org/10.15057/8903</a>
Right	

アンティルの新しい文学をめぐって——

## 「クレオール性 (créolité/creoleness) 礼賛」

恒川邦夫

### 1

今、クレオールが面白い、などと言うと、いささか軽薄なベストセラーのキャッチフレーズめいて、まじめな学究の響きを買いたいのだが、仏語表現黒人文学の20年来のウォッチャーからすると、事実、そうである。本稿はわが国ではまだなじみの少ないクレオール性(仏語 *créolité*, 英語 *creoleness*)について、ジャン・ベルナベ、バトリック・シャモワゾー、ラファエル・コンフィアンが共同で執筆した『クレオール性礼賛』という書物<sup>(1)</sup>を中心に、紹介しながら考える試みである。

本題に入る前に、クレオールという言葉について少々見ておこう。語源はポルトガル語の *crioulo* あるいは *criolo* で、フランス語にはスペイン語を経由して入ったとされる。すなわちスペイン語の動詞 *criar* (ラテン語の *creare*) の過去分詞 *criado* (「主人の家で育てられた、使用人の」というほどの意味) が仲立ちとなってできた言葉だということである。新大陸(アメリカ)では、この言葉は当初「ヨーロッパ人の両親から生まれた植民地の子ども」という意味を持ち、やがて(1) (アフリカ生まれの黒人に対して) 新大陸で生まれた黒人(2) (生粋の白人あるいは黒人に対して、一般に) 混血児、を意味するようになった。

クレオール語とは、したがって、もともとクレオール(混血児)が使用する言葉という意味である。すなわち「植民地の混血児が(使用人である)黒人と話す時に使うくずれたヨーロッパ語」である。ただし、アンティル諸島をふくむ新大陸では、クレオール語はけして《仕事の命令》など限られた場面でのみ用いられる《片こと》ではなく、感情表現も含めたすべての表現に適した《日常語》と考えられていた<sup>(2)</sup>。

そして、クレオール語がそのような《日常語》であることから、実は、一切のドラマが起こるのである。以後、話を仏領アンティル諸島(とくにマルチニック)に限っ

てすすめることにして、初めに、サンゴールが編纂した『仏語表現黒人・マダガスカル新詩集』<sup>(3)</sup>の中から、マルチニックの詩人レオン＝ゴントラン・ダマスの詩の一節を紹介しよう。

母は息子にメモランダムになってほしくて<sup>(4)</sup>、  
 歴史のおさがりがちゃんとできてないなら  
 日曜日に晴れ着を着て  
 ミサに行くのはおあづけよ  
 この子は家のはじさらし  
 この子はほんとにろくでなし  
 おだまりなさい  
 言ったでしょ、フランス語を話さないって  
 フランスのフランス語を  
 フランス語のフランス語を  
 フランスフランス語を<sup>(5)</sup>

「フランスのフランス語 (le français de France)」「フランス語のフランス語 (le français du français)」「フランスフランス語 (français français)」をきちんと話さないで、教育ママが子どもをいませているところであるが、マルチニックの歴史的・社会的文脈のなかにこの場面を置いてみると、原詩の軽妙な味わいとは裏腹に、一つの深刻な事態が浮かびあがってくる。

ここでアンティルの複雑な歴史<sup>(6)</sup>をひもとく余裕はないが、1635年にピエール・ブラン＝デスナンビュックがマルチニック島に上陸して以来、三百年あまりの奴隷制と植民地支配の歴史をもつフランス領アンティルは、住民のフランス文化への《同化》の程度が進んでいることで知られていた。それは一口にいえば、フランス植民地政策の特色である「同化政策」が生み出したものである。アングロサクソンの植民地政策が、《主人》の言葉や文化を原住民に教えることによって「意識」がめざめることを恐れている「隔離主義」によって特色づけられる<sup>(7)</sup>とすれば、フランスのそれは言葉を教え、文化を強制する「同化政策」によって内にとりこもうとするところに特色がある。どちらも他者性 *altérité*, *extériorité* に無頓着であることにおいて、傲慢かつ抑圧的であるが、被抑圧者のアイデンティティーの問題に限ってみれば、「同化政策」の方がいっそう深刻な影響を及ぼすように思われる。今日では古典的なファノンの『黒い皮膚・白い仮面』<sup>(8)</sup>のなかで分析されているように、アンティルの黒人には、白

人がインディアンや土人を迫害している場面を前にすると、自分を無意識のうちに白人に同化して見る反射が培われているという。その一方で、アンティル社会においては、《真っ白》から《真っ黒》まで、中間に段階的なグレイゾーンをはさんで、皮膚の色による差別が徹底している。《真っ白》は本国から派遣されてきた植民地官僚やグラン・ブランと呼ばれる砂糖キビの大農園主であり、《真っ黒》はかつてアフリカから連れてこられた黒人奴隷の子孫である。グレイゾーンというのは、ムラートと呼ばれる混血家系が占めるゾーンである。一滴でも白人の血が混ざっていれば、社会階層が上昇する。その意味で、「同化」は教育の問題であると同時に《血》の問題なのだ。《血》において優位にある者は、教育によって《真っ黒》との差を維持しようとする。上に引用したダマスの詩に登場する母親の反応はその意味で典型的なムラートのそれである。白い血を引くファノンの母親も息子に《真っ黒 (ネーグル)》と同じことをするなど叱り、家でクレオール語をしゃべることを禁じたという。もっともそうした「中間階層」の上昇志向には、砂糖キビのモノカルチャー経済で、耕地の7, 80%を人口の2, 3%にあたる有産階級 (グラン・ブランおよびベケ Békés と呼ばれる富裕な混血家系) が独占している社会背景があり、教育投資以外に子どもの将来を託すものがないという事情があることも理解しておく必要があるだろう。

## 2

『クレオール性礼賛』は1988年5月22日に、フランスのセーヌ・サン・ドニ県で開催されたカリブ海フェスティヴァルで読みあげられた講演のテキストである。しかし、執筆者3人が劇作家 (ベルナベ) と小説家 (シャモワゾー, コンフィアン) であることから、新しいアンティル文学の「マニフェスト」と受け取ってまちがいがないように思われる (以下このテキストを「マニフェスト」と呼ぶ)。ただマニフェストというと、偶像破壊的で調子の高いものが想像されようが、これは目配りのよい穏やかなテキストである。現代アンティル文学の先達たちの達成を吟味し、それぞれに正当なオマージュを捧げたいうえで、今なぜクレオール性なのかを説いている。

現代アンティル文学は父と子と孫の三世代による、三つの時代、三つのスローガンによって、現在に継承されてきた文学である。父は《黒人性 (ネグリチュード)》のエメ・セゼール<sup>(9)</sup>、子は《アンティル性》のエドワール・グリッサン<sup>(10)</sup>、そして孫が脚光を浴びている《クレオール性》のベルナベ、シャモワゾー、コンフィアンたちである。以下、父から孫へと三代にわたる主張の変遷を「マニフェスト」の言葉にしたがって

みていこう。

(1) 《黒人性（ネグリチュード, *négritude*）》

「われわれは永久にエメ・セゼールの息子である」[p. 18]と「マニフェスト」には書かれている。詩人として、政治家として、《ネグリチュード》運動をリードし、実践したエメ・セゼールに対する敬愛の念は大きい。しかし、《ネグリチュード》はアンティール人にとって意識の目覚めの契機にはなっても、究極的なゴールにはなり得ないことを、「マニフェスト」では次のようなことばで述べている。

「ネグリチュード」は、ことばの予言的な燃えあがり以外に、いかなる美学も創出しなかった。そもそも「美」は企ての対象から除外されていた。真実、「ネグリチュード」から発散される驚異的な力に詩法は必要なかったのだ。「ネグリチュード」から奔りし出る光輝はわれわれの刻々の視界にめくらめくばかりの道標を樹立し、一切の魔術の反復を不要にし、エビゴーンたちの活躍の場を奪った。したがって、「ネグリチュード」は未知の熱狂にわれわれのエネルギーを駆り立てることはあっても、われわれの美的混乱をいやすことは少しもなかった。むしろそれは、時に、われわれの病の最も顕著な症候群——内的権利放棄、擬態、遠くの魅惑に打ち負かされる身近な自然さ<sup>(11)</sup>等々、われわれを疎外する数々の要因——をあばきたてることによって、われわれのアイデンティティーの危機を悪化させることすらあった。われわれの病に対する激烈かつ逆説的な治療法として導入された「ネグリチュード」は、ヨーロッパ幻想に、アフリカ幻想を置き換えた。本来われわれを存在の原点につれもどすために始められたはずなのに、「ネグリチュード」は初期の運動のひろがりの過程で、ある種の他者性を刻印された。あこがれの対象（母なるアフリカ、神話的なアフリカ、不可能なアフリカ）も、反抗の表現（大文字で書かれた「黒ん坊」、すべての地上の呪われし者たち<sup>(12)</sup>）も、自我の確認（われわれはアフリカ人である）も、すべて他者性に依拠している。それは避けられない歴史の弁証法的進展におけるワン・ステップ、不可欠の道程ではあったが、そこから脱け出て、大文字の歴史の大道に、暫定的なものであれ、一つの新しい総合、すなわち、われわれ自身の歴史を樹立するということは、まことに容易ならざる挑戦である。

[p. 20]

シュールレアリスムとコミュニズムが知の前衛を占めていた1930年代のバリで、

アンティルの黒人留学生（セゼール、ダマス）とアフリカの黒人留学生（サンゴール）との出会いによって起こった新しい黒人文学運動は、《ネグリチュード》運動として歴史的に位置づけられるが、半世紀以上経った今日、それはアフリカ人にとっても、アンティル人にとっても、過去のものとなったことは否定できない。そのことは、しかし、《ネグリチュード》運動の歴史的意義を否定するものではない。世界に散在する黒人ディアスポラの深層のアンデンティティをアフリカに求め、虐げられ、差別され、起源を奪われてきた者たちに、よって立つべき文化的誇り（たとえそれが神話的な、理想化された、現実的には証明不能なものであったとしても）を与えたことの意義は大きい。「マニフェスト」が、そこから「発散される驚異的な力」、「めくらむばかりの道標の樹立」と称揚するゆえんである。

「セゼールのネグリチュードは一種の洗礼、回復されたわれわれの尊厳を開示する行為だった」[p. 18]。その《ネグリチュード》が父の時代から子の時代に移るにしたがって空転しだしたのは、「マニフェスト」によれば、《ネグリチュード》が標榜する理念がアンティルの現実を捨象したところに成立する「西欧流に考えられた普遍的な一般価値 (généralités universelles pensées à l'occidentale)」[p. 21] に根ざしたものであったからである。基本的な尊厳を回復された人間が、その後、成長するためには、それぞれの具体的な風土のなかに根を下ろす必要があったのだ。

## (2) 《アンティル性 (antillanité)》

エドワール・グリッサンが、奨学金をもらってフォール・ド・フランスのリセ・シェルシュールに送られてきたとき、1913年生まれのエメ・セゼールが先生の一人としていた。グリッサンにおけるセゼールの影響は大きいと思われるが、その歩みは自ずから《父》のそれとは異なる。グリッサン自身「作家としての私の立場はネグリチュードの作家たちとは異なる。フランス人がする一般化とは別だが、彼らもまたある種の一般化をしている。私はむしろアンティルの現実に根源的に根を下ろす、アンティル性を鼓吹する人々に親近感をおぼえる」と言っている<sup>(13)</sup>。詩人、小説家、評論家として、セゼール以降のアンティル文学の最も大きな存在となったグリッサンについて、《孫》の世代に属するシャモワゾーは「マニフェスト」とは別の講演で次のように言っている。

私の最初の本が出版されたとき、文芸ジャーナリストたちは私がどのような流派に属する作家なのかを知りたがった。彼らには驚きであったかもしれない

が、私はきっぱり断言した。基本的に、グリッサンであると。(…)

書く前の精神統一のために、私はいつもグリッサンの本を開いたものだ。数ページ読む。するといかなる思想、いかなる人文科学からも得られないあるものが私のなかに満ちてくるのだ。書きあぐねると、また私は彼の書く文章の渦のなかに逃げこむのだった。いくつかの章の書き出し、彫琢された描写の二つ、三つを拾い読むのである。(…)

そして、私はこれまで何度、階下に行って確かめたいという気持ちに駆られて、夜、起きたことだろう。何度、確かめようと、手当たりしだいに彼の本を手にとって(彼の本は、そのおそるべき力が一カ所に集中しないよう配慮したみたいに、家中に散らばっている)頁を開き、あちこち読み散らしたことだろう。何度、疑いにとらえられた精神で、私はそこに飛び込み、どこかに不備がないか、不協和音がないか、不整合がないかと探しまわったことか。しかし、そうしてグリッサンの文章を読むたびにいつも抗い難い賛嘆の念にとらえられるのだった<sup>(14)</sup>。

若き作家から先達への最大級のオマージュであるが、「マニフェスト」でも、もう少し抑えたことばではあるが、はっきりとグリッサンが新しい時代を画したと宣言している。

要は、内なるヨーロッパやアフリカをやみくもにかなぐりすてることではない。彼らがそこに負っているものが多々あることは否定すべくもない事実である。しかしアンティル人であることは、それだけではない。目に立つ表層の奥に隠された(抑圧された)何かがある。作家の目はその深層部にまで届かなければならない。

われわれが体現しているこの新たな人間性のカオスに視線を投じること。アンティル人とは何かを理解すること。まだ口ごもりがちで、動き出していないこのカリブ海文明の意味を知覚すること。ドペストル<sup>(15)</sup>とともに、われわれの世界のアメリカ的次元、この世界に占めるわれわれの空間、を把握すること。フランツ・ファノンにならって、われわれの現実を探索し、カタルシスをめざすこと。われわれの疎外の隠されたメカニズムを意識の太陽<sup>(16)</sup>にさらすこと。によって、われわれの存在を浄化しつつ、われわれの存在を分解すること。自らの特異性の内深くへ進入し、未来へ向けて備給し、心底われわれの姿に戻る…エドワール・グリッサンのことばである。目的は見えていた。このアンティル文明をそのアメリカ的空間において捕捉するためには、叫びや象徴や罵

倒や大仰な予言から脱け出て、西欧的価値によって支配された普遍性へのフェティシスト的肩入れに背を向ける必要があった。われわれ自身を綿密に探索するためにそうする必要があったのだ。探索は幾多の忍耐、積み重ね、繰り返し、足踏み、こだわりのたまものであり、それにはすべての文学ジャンル（個別に、あるいは脱境界的に）の動員、すべての人文科学の横断的な（しかし必ずしもアカデミックな形ではない）参加がのぞまれるだろう。それは遺跡の発掘を思わせる作業である。空間は碁盤の目に細分化され、フランス化の表層の下に埋もれたわれわれ自身を、けして損なわず、失わないよう、注意深く刷毛ブラシを使って進められる作業である。 [p. 22]

ここで重要なのは、《アンティル性》といわれるものがけして《今、ここ》に明白な形で存在するわけではないという事実である。3世紀あまりにおよぶ奴隷制・植民地制・海外県<sup>(17)</sup>の歴史の中で、あらゆる価値のフランス化が進行し、アンティル人の想像界は想像以上に抑圧され、フランス化された表層の自我以外は深層に埋もれているのである。そうした深層を顕在化するには、「すべてを疑い、一見明白だと思われることにまで何故と問う子どもの目」 [p. 24] が必要である。しかも立ち現れてくるものは、少なくともフランス化されたアンティル人の目には必ずしも《美しく》ない。しかし《美しく》ないものを正視し、それを自ら引き受ける *acceptation de soi* 以外に「内観」 *vision intérieure* が発達する下地はない。「内観」とは、フランス化 *francisation* によって培われ、植え付けられた「外からの目」、西欧が西欧の価値基準で他者を見る《目》に對置されるものである。アンティル人としての「内観」によって、身近な周囲の世界を見直し、「外からの目」によって二義的・周辺的であると考えられてきたものを中心に据えること、そうした作業なしにアンティル人に真の意味の創造性は生まれてこない。「内観」によって支えられた美学（アンティル人にとって《美》とは何か）、哲学（アンティル人にとって《普遍性》とは何か）なしに、芸術も道徳も生まれてこない。「己の内奥に発掘されずに埋もれているものを一括して拒絶する」 [p. 25] ような精神に、どんな芸術が生み出せるというのか？ 先に引用した遺跡の発掘作業の比喩を敷衍すれば、《アンティル性》とは、アンティル人という《壺》を構成するカケラ（要素）を発掘し、丹念にほこりを払って陳列する段階に照応した規定である。カケラを組み合わせて美的鑑賞に耐える《壺》を再構成するには、よりダイナミックな総合運動が必要になる。グリッサンの仕事は単なる《アンティル性》の提唱ではなく、《壺》の再構成へと向かうベクトルを多分に含んでいるが、独自のカリブ海文



明の構築とか、西欧のおしつけによる「秩序」や「普遍性」の物差しでは測れない「カオス」chaosと「多様性」divers<sup>(18)</sup>によって成立する新しい文化圏というような話になると、《アンティル性》では狭すぎる。地域性を越えた幅広いコンセプトが必要である。それが《クレオール性》なのだ。

### (3) 《クレオール性 (créolité)》

「マニフェスト」によれば、アンティル人は三重に規定されている。一つは前段で述べた《アンティル性》である。カリブ海に浮かぶ島々で、かつての三角貿易の窓口であり、西欧列強の植民地時代には、戦利品として、めまぐるしく取引された歴史を持つ。現在のステイタスは独立国だったり、かつての宗主国の海外領土だったり、海外県だったり、まちまちである。ただそこにやって来た（あるいは連れてこられた）ヨーロッパ人、アフリカ人（黒人）、レヴァント（エジプトからギリシャまでの地中海東部沿岸地方）人、アジア人の適応には、一つの類型がある。《アンティル性》とは、別の言い方をすれば、その類型に照応した規定である。

もう一つの規定は《アメリカ性 (américanité)》である。《新世界性》と言ってもいい。合衆国であれ、カナダであれ、中南米であれ、アメリカには旧世界（ヨーロッパ）とは根本的に異なる自然・歴史があり、その独自の自然・歴史への適応が《アメリカ性》を生み出した。そうして見れば、《アンティル性》は《アメリカ性》の下位分類である。《アンティル性》と並んで、《カナダ性》《アルゼンチン性》等々があるのである。

以上の二つの規定が地理的ないしは地政学的な概念であるのに対して、三つ目の《クレオール性》は地理的概念ではない。《クレオール性》の一般的定義は「島であれ、大陸の飛び地であれ、限られたテリトリーに、文化的に異なる人々が唐突に寄せ集められ、共同生活を始めることによって生じる文化の混淆」[p. 30]である。アンティルからハワイ、フィリッピンを経て、セーシェル、ザンジバルまでさまざまなクレオール語・クレオール社会（地域）が存在する。またアメリカ合衆国のような大国では、その一部に《クレオール性》が観察される地域が存在する。例えば、ルイジアナ州やミシシッピ州はクレオール現象が顕著なところである<sup>(19)</sup>。

《クレオール性》が発現したところは、歴史的には、植民地やプランテーション農業が営まれていたところである。しかし、経済のグローバル化が進み、世界的に資本のみならず労働人口が移動する現代世界の文脈においては、すべての社会にクレオール化の萌芽があると言っていいだろう。今後、すべての社会が多少なりとも多

民族・多言語社会になっていくとすれば、《クレオール性》は近未来世界の重要なトピックスの一つとなるであろう。

さしあたって、「マニフェスト」の作者たちが問題にするのは、具体的な彼らの世界（たとえば、フランス海外県としてのマルチニック）における《クレオール性》である。ヨーロッパ（フランス、スペイン、ポルトガル、オランダ）、アフリカ（黒人アフリカ）、レヴァント、アジア（インド、中国）からやってきた人々が織りなす多民族・多言語空間、それは「気持ちの悪いマグマ (cet inconfortable magma)」[p. 26] として抑圧されてきたものである。知識人たちは《混淆》を嫌って、島の現実と大衆から完全に切れたところで、「歴史的な大文化の閉ざされた規範性の中に逃げ込もう (chercher refuge dans la normalité close des cultures millénaires)」[p. 27] としてきた。エメ・セゼールの長篇詩『祖国復帰のノート』*Cahier d'un retour au pays natal*の冒頭に繰り返される「出発する (partir)」とは、「(この混沌たるマグマのような島から、普遍的で純粋な文化の国フランスへ) 脱出する」という意味である。そうした事情を、「マニフェスト」では次のように分析している。

クレオール性とは誤った普遍性、単一言語主義、純粋さを打破するものだ。(…)。クレオール性とはわれわれの根源的な糧にしてわれわれの将来、われわれの原初のカオスにして諸々の可能性を秘めたマングローブである。われわれはあらゆる試行錯誤を恐れず、自らを複雑なものとして容認する必要を痛感して、クレオール性に向かう。なぜなら、われわれのアイデンティティーの根幹は複雑さだからである。われわれのクレオール性の探求は、クレオール性の複雑さに見合った複雑な思考によってなされなければならない。規範性の少数の法則に照らして単純化しようとしたときには、われわれ自身の存在がわれわれ自身の目にも異様に映ったはずだ。 [p. 28]

したがって、この《クレオール性》も、依拠するものとしてすでに形を成して《今、ここ》に存在するものではない。不断に探求し、顕在化させ、形を与える努力なしには、活性化され得ないものである。あるのは直観にもとづく一つの確信（「《クレオール性》はわれわれを古い世界から解放する」[p. 52]）と民族や言語の《るつぼ》と形容されるにふさわしい混沌とした現実だけである。たとえば、植民地から海外県への道を選択したマルチニック人にとっては、学習によって、この混沌から脱け出て「普遍的で純粋な」大文化（フランス文化）に寄り添うほうがわかりやすい。しかしそれによって失われるのは自己のアイデンティティーである。奴隷制や植民地支配の歴史

の一切を忘れて、民族や言語の現在（マグマ）からも目をそむけて、何が得られるというのか。第一、われわれには果してその名に値する歴史があるのか。民族や言語の《現在》がきちんと把握されているのか。抑圧者の歴史は書かれていても、われわれ被抑圧者の歴史はまだ書かれていないのではないか<sup>(20)</sup>。クレオール語の《現在》は軽蔑され、無視される対象にはなっても、研究され、掘り起こされる対象にはなっていないのではないか。それならば、誰がわれわれの歴史を書き、誰がわれわれの《現在》を掘り起こすのか。われわれ文学者（芸術家）でなければ！そしてわれわれ文学者（芸術家）はどこからその歴史を書き、《現在》を掘り起こす力を汲み取るのか。われわれの根源であり、われわれの日常を形作っている《クレオール性》からでなければ。創造力とは自分を生み出した大地から、自分が下ろした根を通して汲み取る力である。「マニフェスト」の主張はおよそ以上のごとくである。かくして

フランス語の習得のためによかれと思って、母親が子どもの喉元でクレオール語を抑圧してしまうのは、その都度、子どもの想像力の芽を摘み取り、子どもの創造力を収容所送りにするようなものだ。 [p. 43]

ということになる。

とはいえ、アンティル人の言語状況は複雑である。第一にクレオール語はアンティル人の肌にしみこんだ第一言語であっても、話し言葉であって、書き言葉ではない。もちろん「口承性 (oralité)」が、人間のコミュニケーションの様態として、「文字表現 (expression écrite)」に劣るという理由はない。とくに口承性の伝統の中に「アンティル人の存在の大事な部分が眠っている」[p. 35] というのであれば、それを抑圧することはアンティル人を文化的に疎外することになるだろう。しかしアンティル人にとって言葉はクレオール語だけではない。「クレオール語の作家であるわれわれの第一の財産は、多くの言語を所有していることだ」[p. 43] と書かれているように、マルチニックやグアドループやギアナの作家にとって、フランス語は「二つ目の言語 (une langue seconde)」であって、いわゆる外国語 *langue étrangère* ではない。たしかにそれは抑圧者の言語であったが、長い歴史の中で、「われわれはフランス語を征服した (Nous l'avons conquise, cette langue française)」[p. 46] ののである。別の言い方をすれば、「クレオール性によって、われわれはフランス語に消えることのない刻印をのこした」[p. 46]。いずれにせよ、彼らが話し言葉のみならず、自在に操れる書き言葉も所有していることは明らかである。それなら彼らは何を企んでいるのか。フランス語を一層クレオール化することか、クレオール語をフランス化することによって、

「口承性」に「書き言葉」のステイタスを与えることか。

いかなるフェティシズムにも関係なく、われわれにとって言葉 (=ランガージュ) とは言語 (=ラング) の自由で、責任ある、創造的な使用を意味する<sup>(21)</sup>。それは必ずしもクレオール化した新しく創られたフランス語でも、フランス化した新しく創られたクレオール語でもない。それはついに見出され、決定されたわれわれ自身の言葉だ。 [p. 47]

といい切る「マニフェスト」の真意は、特定の言語とフェティシスト的 (あるいは偶像崇拜的) な関係を取り結ぶことを排して、能うかぎり多くの言語と接し (多言語主義は彼らの宿命である)、それらの言語と横断的に戯れることによって今までにない新しい表現空間を開くことである。

クレオール性は単一言語空間ではない。それはまた水密隔壁によって言語間の交流が遮断された多言語空間でもない。クレオール性の領分は言葉 (=ランガージュ) であり、捕食の対象はすべての言語 (=ラング) である。多言語間の接触 (摩擦や干渉の発生現場) はポリセミーの眩暈である。そこでは一語が複数の語に値する。暗示組織、示唆力の下地が形成され、二種類の知性の交流の場が準備される。あらゆる言語の詩的機能を同時に体験すること、それは単に個々のことばの詩的機能を豊かにするばかりでなく、とくに言語の習慣的秩序を打ち破り、定まった意味を破綻させる効果を持つ。そうした断絶こそ、われわれの文学に対する人々の関心を増大させるものだ。 [p. 48]

「マニフェスト」をさらに読みすすむと、彼らの企みはフランス語でもクレオール語でもない「第三の言語」interlangue<sup>(22)</sup>の創出であることがわかる。もっともこれは彼らが抱えている問題の困難さを象徴する、イメージの勝った言い方で、実際にどのような言語を創出しようとしているのかということになるといささか曖昧だと言わざるを得ない。わかっていることは、エスペラント語のような人工言語を創ろうというのではなく、あくまで自然言語を素材にして、彼らの世界において本質的である多言語性をより忠実に反映した言語を創ろうとしていることである。その意味ではこの「第三の言語」は多言語に横断的に関わる新たな「混成語」というべきであろう。《クレオール性》の礼賛と新しい言語の創出という彼らの企図は、「混血性、混成、混合」という彼らの現実を、未来に向けてのダイナミズムの原理として積極的に容認する<sup>(23)</sup>点において、通底するのである。

かくして、《クレオール性》に根ざした、新しいアンティル文学の達成が、シャモワゾーやコンフィアンたちの具体的な作品を通して、注目を浴びるようになった。1992年シャモワゾーのゴンクール賞受賞を境に、アンティルの文学はにわかに活気づき、つぎつぎと作品が発表され、さまざまな賞が授与され、《フランス語表現》文学界の読者の関心をひきつけた<sup>(24)</sup>。彼らがそれらの作品によって、どのような新しい「言語」を創り出したかを検討するには、稿を改めなければならないが、文化的大言語の一つであるフランス語とクレオール語／クレオール性の接触を、メジャーな前者にひきつけて整序するのではなく、マイナーな後者のカオスのダイナミズムに期して解体・再構築するという試みは、単なるアンティル文学の新生という枠を越えて、今後予想される新しい世界秩序の下における《文化原理》としても、注目に値するものである。

大原理、大言語、大文化の名の下に、併呑・統合され、彼らの《マイナーな叫び》を抑圧・圧殺されてきた文学者たちが、「世界の叫び」Le cri du mondeをテーマに1993年11月にフランスのストラスブールで開催した第五回「ストラスブール・欧州文学の四つ角」で、エドワール・グリッサンは基調講演を引き受け、そのなかで次のように述べている<sup>(25)</sup>。

私は現在の諸文化の衝突をカオスー世界 chaos-monde と呼ぶ。文化はみな真っ赤に燃え、反発しあい、消滅し、ふみこたえ、まどろみ、おもむろに、あるいは、目にもとまらぬ速さで、変貌している。その光輝、その爆発の原理や経済はまだわれわれが何一つ知るところのない未知の領域である。(…)

それらを支配する一般経済原理はクレオリゼーションである。世界の列島の一つにすぎない、私の住む列島から、私はわれわれがこのクレオリゼーションについて考えることを提案する。

クレオリゼーションは世界のマチエールを混合し、現代に生きる人々の諸文化を結合・変化させる、おしとどめ難いプロセスである。

クレオリゼーションはアイデンティティーの喪失、存在者の溶解ではない、自己の放棄でもない。それは何よりもまず存在の固着化に対する警戒心を教えてくれるものである。

(…)

クレオリゼーションは不可測なものであり、凝固したり、停止したりできないものであり、何らかのエッセンスあるいは自己同一化の絶対値によって与えられるものではない。存在者は持続することによって変化すると認めることは、絶対値を定義することではない。変化、代替、交換の中で何が持続するかといえば、恐らくは、まず、変化しようとする性向ないしは勇気である。

私はこのクレオリゼーションという言葉で、月並みな総合——それなら結局つまらないことになってしまう——を意味する言葉としてではなく、かつてないベクトルの和——独自のエッセンスとか、排他的な自分自身の価値にとらわれて硬直化しないために——を意味する言葉として、提案する。

### 注

1. Jean Bernabé, Patrick Chamoiseau, Raphaël Confiant, *Eloge de la créolité*, édition bilingue, Gallimard, 1993.
2. Albert Valdman, *Pidgins et créoles. Indications*. in *Les langues dans le monde ancien et moderne*, ouvrage publié sous la direction de Jean Perrot, Editions du CNRS, 1981, pp. 624-625.
3. Léopold Sédar Senghor, *Anthologie de la nouvelle poésie nègre et malgache*, Quadrige/PUF, 1985.
4. 「メモランダムになってほしい」というのは、子どもが歴史の年代など、スラスラ答えられるよう「覚書帖」のようになってほしいという意味。
5. ダマス (1912~1978) は仏領ギアナ (海外県) のカイエンヌに生まれた詩人。引用した詩は詩集『色素』*Pigments* (1937年) 所収の詩「しゃっくり」*Hoquet* の一節。注3のサンゴール編集のアンソロジーの p. 16 に引用されている。  
平易な日常的フランス語で、淡いユーモアに彩られた詩を書いた。セゼール、サンゴールとともにネグリチュード運動の旗手となった一人。
6. 日本語で読めるこの地域の歴史書として、E. ウィリアムズ著『コロンプスからカストロまで』I, II, 岩波書店 (1978年) がある。  
フランス語で書かれたものとしては、  
D. Guérin, *Les Antilles décolonisées*, 1956.  
J. Pouquet, *Les Antilles françaises*, PUF, 1971.
7. 古典的な例としては、シェクスピアの幻想喜劇『テンペスト』のプロスペロとカリバンの関係を見よ。
8. Franz Fanon, *Peau noire, masques blancs*, Editions du Seuil, 1952.
9. Aimé Césaire. 1913年マルチニック生まれ。ネグリチュード運動の創始者の一人として、またネグリチュードという新語を創った詩人として、さらには戦後フランス詩の最も重要な詩人の一人として世界的に知られる。セゼールに関する研究書は多数存在するが、近刊のエメ・セゼール論として、ラファエル・コンフィアンの、*Aimé Césaire, Une traversée*

*paradoxale du siècle*, Stock, 1993 がある。

10. Edouard Glissant. 1928年マルチニック生まれ。詩人、小説家、評論家。主な作品に、詩集『黒い塩』*Le sel noir*, 評論『意識の太陽』*Soleil de la conscience*, 『アンティル論』*Le discours antillais*, 小説に『レザルド川』*La Lézarde*, 『第四世紀』*Le quatrième siècle*, 『マルモール』*Malemort*, 『奴隷監督官の小屋』*La case du commandeur*, 『マアゴニー』*Mahagony* などがある。(以上すべて出版社はバリの Editions du Seuil。)
11. 「内的権利放棄」le déport intérieur というのは「アンティル人が自分からアンティル人としての権利を放棄すること」、すなわち、西欧志向が強いために、自分からアンティル人としてのアイデンティティの確立につながる行為を忌避すること。「擬態」mimétisme とは「動物が環境に合わせて自分を目立たなくすること」「無意識の模倣」の意。いずれも少しでも白人と同じところにしようとする長い年月の間に培われたアンティル黒人の反射である。「遠くの魅力に打ち負かされる身近な自然さ」le naturel du tout-proche vaincu par la fascination du lointain とは「遠く離れた西欧の魅力にとらわれて、自分にとってはより自然な、身近かなアンティルの現実をないがしろにする(習癖)」の意。
12. 「すべての地に呪われし者たち」は国際共産主義の歌「インターナショナル」の歌詞にある言葉。ファノンの著作のタイトルにも使われている。  
Franz Fanon, *Les damnés de la terre*, 1961.
13. Alain Rouch, Gérard Clavreuil, *Littératures nationales d'écriture française*, Bordas, 1987, pp. 321-322.
14. *En témoignage d'une volupté* in *Carbet*, n° 10-Décembre 1990, pp. 143-150.
15. René Depestre, 1926年生まれの高ハイチの詩人。反体制を貫いたため、ハイチを追われ、20年もの間、キューバに亡命、ハバナ大学の教員を勤めた。現在はバリのユネスコ本部に勤務している。
16. 「意識の太陽」はグリッサンの評論集のタイトル。
17. マルチニックは二次大戦後、独立か海岸県か選択をせまられて、海外県の道を選んだ。
18. 「多様性」divers については、「マニフェスト」に Victor Ségalen の詩の引用がある。  
C'est par la différence et dans le divers que s'exalte  
l'Existence.  
Le Divers décroît.  
C'est là le grand danger.  
[大意]  
われわれの生が  
高揚するのは差異と多様性によってである。  
多様性が減少する。  
そこに大いなる危険がある。  
なお「マニフェスト」では、「多様なること、存在の多様性」という意味で Diversalité という新語を作って、使っている。
19. Ian F. Hancock, *Répertoire des langues pidgins et créoles* in *Les langues dans le monde ancien et moderne* (前掲書, 注2参照) pp. 631-647 では世界中を調査し, 174種類におよぶピジンおよびクレオール語の存在を報告している。

20. 「われわれの「歴史」(より正確には単数ではなく複数の歴史)は植民地の「歴史」の中に難破している。集団の記憶を回復することがわれわれの急務である」[pp. 35-36]
21. ここで使われているラング、ランガージュの区別は、ほぼソシュールの用語のそれに準じている。すなわちラングは「記号体系としての抽象的なレベルでとらえた言語」に対応し、ランガージュは「個人が運用した具体的な表現としての言葉」に対応する。
22. interlangue は一般には「国際語」を意味するが、ここでは「多言語にまたがった、どの言語にも収斂されない、第三の言語」の意である。
23. 《ネグリチュード》運動の旗手の一人、セネガルのレオポール・セダール・サンゴールは、つとに、「混血/混淆」métissage が人類の文明の進歩のもっとも基本的なダイナミズムであると説いている。たとえば、サンゴールの評論集『自由』第三巻 *Liberté* 3, Editions du Seuil, 1977 を参照。ただし、《世界文明》civilisation de l'Universel などというところに、やや理想主義的に過ぎるサンゴールの言葉使いの時代性が見えて、そのままの形では「マニフェスト」の執筆者たちの賛同は得られないかもしれない。
24. シャモワゾーのゴンクール賞作品は『テキサコ』Texaco というマルチニックの民衆に深く根ざした小説。

クレオール性/クレオリゼーションの担い手は、現在のところ、黒人である。1980 年半ばを過ぎて、ノーベル文学賞がかつての《ネグリチュード》文学圏(広義にはアメリカの黒人文学者も含む)に属する作家たちに授与されてきたのは偶然であろうか。ちなみに名前を列挙すると、ウォール・ショイinka(1986年, ナイジェリア), デレック・ウォルコット(1992年, セイント・ルーシー島), トニー・モリソン(1993年, 米国)となる。1991年には白人ではあるが、南アで一貫して反アパルトヘイトの立場から小説を書いてきたナディン・ゴードイマーがノーベル文学賞を授けられている。

25. 第五回「ストラスブール・欧州文学の四つ角」Carrefour des littératures européennes de Strasbourg は1993年11月4日から8日まで開催された。イスラム原理運動や旧ユーゴスラヴィアのセルビア人民族純化運動など過激な宗教的・民族的・文化的排他運動に対して、表現の自由・人権の尊重などをめぐって文化人・文学者の世界的連帯を訴える声(「アピール」の採択と「作家議会」の結成の呼びかけ)が基調となった。大会には同年のノーベル文学賞受賞者トニー・モリソン(アメリカの黒人女流小説家)やブルデュエ、デリダといったフランスの社会学者や哲学者も参加、また『悪魔の詩』でイランから死刑宣告を受けているサルマン・ラシュディも顔を見せた。

なお引用はフランスの新聞「ル・モンド」の読書欄 *Le Monde des livres* (Vendredi 5 novembre 1993) に掲載された演説草稿から。